

19. Survivinは融合転写因子 E2A-HLFの下流である

小児科学

奥谷真由子, 黒澤秀光, 杉田憲一, 有阪 治

【目的】 E2A-HLFはt (17; 19)⁺急性リンパ性白血病 (ALL) で生じる転写融合因子でアポトーシスを抑制することで白血病の発症に関与することが知られている. E2A-HLFの抗アポトーシス機能を有する下流遺伝子を同定する.

【対象・方法】 E2A-HLFはRASシグナル経路を介してアポトーシスを抑制する. RASシグナル伝達経路により発現調節される抗アポトーシス機能を有するsurvivinを候補遺伝子として研究を実施した.

【結果】 t (17; 19)⁺ALL細胞でsurvivinの高発現を認め, この細胞にE2A-HLFドミナントネガティブ変異 (dn) を誘導するとsurvivinの発現を抑制した. t (17; 19)⁻ALL細胞にE2A-HLFを誘導するとsurvivinが高発現した. Survivinはt (17; 19)⁻ALLではG2/M期優位に発現していたが, t (17; 19)⁺ALLで全細胞周期に高発現していた. レポーターアッセイでE2A-HLFはsurvivinプロモーターの細胞周期関連領域 (CHR) を制御していた. t (17; 19)⁺ALL細胞にsurvivin (dn) を誘導すると全細胞周期で急速にアポトーシスが生じた. Survivinの抗アポトーシス機序はCaspaseとCaspase非依存性のAIFが関与していた.

【結語】 E2A-HLFがsurvivinのプロモーターのCHRに結合する転写抑制因子に拮抗し, 細胞周期非依存的にsurvivinを高発現し, 抗アポトーシス機能を獲得し, 白血病化に関与していることを示唆された.

20. 口腔癌患者におけるFDG-PET検査の有用性に関する研究

(第一報): 術前頸部リンパ節転移の評価

口腔外科学

品川泰弘, 土肥 豊, 仲丸優美, 酒井英紀,
川又 均, 佐々木忠昭, 今井 裕

PETセンター

村上康二

【目的】 PET検査が口腔癌患者の頸部リンパ節転移の評価に有用であるか否かを検討した.

【対象】 2005年4月から2006年7月までに, 当科で治療を行った口腔癌症例のうち, PET検査を行った45症例で, PET検査総数62検査を対象とした.

【方法ならびに結果】 1) 症例ごとに, 頸部リンパ節転移の有無について評価するとともに, 画像上, 視覚的に確認できるFDGの集積との関係について検討した. また, CTでも同様な検討を行い, それぞれの関係を比較検討した. その結果, PETでは, 感度87.5%, 特異度77.3%, 正診率81.6%で, CTでは, 感度84.7%, 特異度76.0%, 正診率78.9%で, 統計学的な有意差は認められなかった. 2) 次いで, 個々のリンパ節に対して評価を行うと, PETでは, 感度90%, 特異度98.3%, 陽性的中率66.7%, 陰性的中率99.6%, 正診率97.9%であり, PETは, 陰性的中率が極めて高いが, 陽性的中率が低いという結果であった. 3) さらに, PETの陽性的中率をさらに向上させるために, 定量的な評価すなわち, SUV値 (Standardized uptake value) を用いて検討した (カットオフ値4.0). その結果, 感度85%, 特異度100%, 陽性的中率100%, 陰性的中率99.4%, 正診率99.3%となり, SUV値を用いた評価により陽性的中率が向上した.

【結論】 FDG-PETにおいてSUV値を用いた定量的評価は, 口腔癌の頸部リンパ節転移の評価に有効であると考えられた.